依存性についての一研究

―依存的行動と，質問紙並びにTATで測定した依存性との関連―

石　井　伸　子

A study on dependency—Relation between dependent behaviors and dependent traits measured by questionnaire and TAT

Nobuko Ishii

＜問　　題＞

人は，対人関係を通じて社会化される　と言われてきている。この，対人関係の成立，維持の基礎にあたるものとして「依存性」という人間に対する関心の向け方を記述する概念が考えられる。最初は親子関係の研究の一部としてとり挙げられていた。依存性自体が主テーマとなった研究は1953年の Sears et al. が最初であると言われている。更に1960年代には研究対象の拡大，内容の拡大がなされた。我が国において，高橋（1966, 1968, 1970）が中・高・大学生女子を対象に，依存性を，a）依存の様式とそのドミナンス，b）依存の対象の機能分化，数，種類，c）依存要求の強度，といった三要因からなる依存構造によってとらえる，といった新しい試みをしている。そして，三群の結果を比較し，「依存性とは人間にとって本質的な傾向であり，精神的な支えを求めるというその機能は，生涯人間につきまとうものである，と考えられる。ただ，依存の対象，様式において異なるのみだ」(1966) と結論づけている。

依存性をいくつかの下位概念に分けて考えるといった従来の研究の在り方に比し，依存構造からとらえたという点で，高橋の研究はより具体的・実際的になった，といえよう。この研究から，依存性は対象，様式において異なるという示唆が得られた。このことは，人がその時にいる場，状況によって異なる依存行動をとる，とも言いかえられよう。そこで本研究では依存的行動というものが，どの様な場面で表出されているかに着目して見ていこうとする。

今までの研究では，TAT, EPPS などの測度の一つを用いて測定した依存性と，なんらかの依存的行動についてみたものはある。（山本 1965, Zuckerman & Grostz 1958）．また，依存性について測定のレベルの異なるテストを施行し結果の相関を比べ，テストの構成的妥当性をみているものもある。（Zuckerman et al. 1961）しかしながら，テスト間の関係と行動発現の場面をも加味して検討した，以上の中間に位置する第三の研究はほとんどなされていない。例外的に複数の場面での行動を調べた，Bernardin et al. (1957), Kasl et al. (1964) においてですら，異なる場面における行動を並列して比べているのみである。そして，予測通りの結果が得られないと，依存性と，扱った行動との間に，なんらかの関係があるとは言えないと考察，結論づけられる。ところで古く K. Lewin によって B=f (P•E) と提唱された様に，行動は人格的要因と場とのダイナミックスによって生じるとするならば，依存行動を考える場合，人格構造ならびにその発現する場の検討なしに，一義的に「依存性」として人格をとらえ，行動との関係をみてい

る従来の在り方には欠けている所があるように思われる。例えば，行動としては他者評定によって得られたものを取り出し，質問紙から投映法までの様々なテストとの関連をみたのが Zuckerman et al. (1961) である。彼らは Murray (1938) の要求体系内の求護，屈従，自律　支配，恭順から依存性の強さを測定しようとした。他者評定と種々の測度との相関から測度の併存的妥当性，概念的妥当性を検討している。そして依存性の測定には間接的テストよりも直接的なテストの方がすぐれていると結論づけている。しかしながら，この研究はまた，次の様に解釈もできよう。投映法的なテストで測定された依存性は，他者評定でとらえられる依存行動にあらわれにくい。直接的なテストによって測定される依存性は，他者評定でとらえやすいものである。

人格のとらえ方は様々であるが，本研究では測定法という観点をつけ加え，自覚可能かどうか（自己認知できるかどうか）に分けて考え，次のことを前提とする。人の行動は，人格の自覚可能な部分と不可能な部分との力関係によって生じる。加えてこの部分の力関係は，行動発現の場面に規定されるというのである。図示すると以下のようになる。

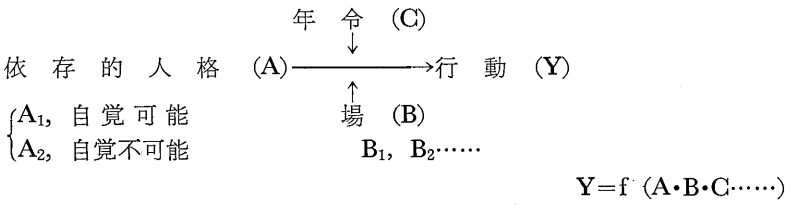

図 1. 行動と諸要因との関係

〔注〕A_1 A_2…と Y との関係を同一の時間軸における一平面と考え，場によってその構成が変わると考える。この平面が発達的には縦に積み重なっていくと考える。（今回の研究では年令，性別は一定にしておく。）

実際には，自覚できるレベルの依存性は自己評定形式の質問紙（以下，SR と略す），自覚できないレベルの依存性は TAT によって測定することとした。測定された二つのレベルの依存性が，人の日常場面並びに危機的な場面といった二つの異なる場面における外的行動と，どの様に係わっているかを見ていく。具体的には他者評定で日常行動を調べる。（吉元勇 1965, Zuckerman et al. 1961）. また，危機的場面としては同調への圧力のかけられる場面を導入する。同調への圧力のかけられる場面とは，自分と他人との間に意見や行動の不一致が存在し，多数であるという点から，他人の方が正しい様に思われる場面と考えられる。ここでとられる行動としては圧力の方向へ自分の信念，意見，行動を近づける様に変化する，遠ざかる様に変化する，無変化といった三種が考えられる。(Crutchfield et al. 1962). による「同調・反同調・独立」）。具体的には「依存性は賞め，安心，助け　注意，接触などを他人に求めて頼る傾向で，乳幼児から大人にまである」と定義して，一応次の仮説をたてて調査，実験を行なった。

I. 人の日常行動は，TAT よりも SR によって測定された依存性の程度によってより強く規定されているだろう。

II. 危機的場面での行動は，SR よりも TAT によって測定される依存性の強さに規定されるだろう。

＜方　　法＞

A. 質問紙

1．自己評定尺度（SR）：Murray（1938）5要求（Succorance…A 尺度，Dominance…B, Autonomy…C, Abasement…D, Deference…E）を下位尺度とする50項目からなる質問紙を作成した。回答様式は各項目に対して「はい」「？」「いいえ」の三件法である。

女子短大生260名を被験者として各下位尺度毎に G-P 分析を行ない，有意水準に達したものから10項目ずつ項目を選択した。また奇偶折半法を用い尺度毎の信頼性を確かめた。（項目については付表参）

2．他者評定尺度（OR）：以下の手続きで作成された10項目からなる質問紙。回答様式は SR と同様。

女子短大生を対象に自由記述形式で依存的行動についての項目の収集→心理学専攻の院生による項目の妥当性の評定→文章の修正，最終項目の決定。　次の項目を使用した。①自分なりのしっかりした考えをもって行動する。②自分がリーダーになるよりも他の人から指導されることを好む。③困ると助けを求めることが多い。④自分の考えを他の人に理解してもらおうと努力する。⑤他の人と同じ様に行動しているかどうかを気にする。⑥「これでいい？」などと聞くことが多い。⑦人から認められているかどうかを気による。⑧ささいなことでもすぐ他の人に相談する。⑨他人の意見を聞くと決心がぐらつきやすい。⑩おとなしく人に従う。

3．TAT：ハーバード版6枚（No. 3 BM, 4, 8GF, 10, 13B, 13MF）

B．同調実験

1．課題：予備調査の結果に基づいて次の二課題を用いた。（「男性と女性とは本来異なった役割りをもっているのだから，普通夫が職業につき，妻が家事に専念するのが当然だ」「人間は本来ひとりぼっちであり，共感し合うということは不可能である」）

2．課題に対する意見値の測定：課題に対する賛否を「非常に賛成」から「非常に反対」までの7段階評定尺度を用いて測定した。

3．課題に対する関心度，熟知度の測定：「非常にある」から「非常にない」の5段階評定尺度で測定した。

4．同調への圧力の操作：①同調への圧力をかける為に情報の導入（「さきほど行ないました二つの質問からなる調査は，他の短大や，この短大の他の授業でも実施しています。あなたがたの意見も加えてみますと次の結果になりました。」）②平均値の提示：あらかじめ用意しておいた偽りのものを与える。

（課題1 ├─×─┼─┼─┼─┼─┼─┤ 課題2 ├─┼─×─┼─┼─┼─┼─┤
×印の所）

C被験者

女子短大生96名（同調実験では実験群79名統制群17名に配分されている。）

D.　一般手続

教示はすべて筆者が行ない，以下の手順で実施した。

同調実験1（事前意見，関心度，熟知度の測定）→SR→OR→TAT（プロジェクターを用い集団式で実施…30秒提示，5分30秒で作話）→同調実験2（実験群：同調への圧力の操作→事後意見の測定，統制群：事後意見の測定）

E.　結果の処理

1．SR：「はい」「？」「いいえ」各々に2．1．0点を与え下位尺度毎に粗点を算出し，T得点化した。（但し尺度 B, C については逆尺度として扱った。）次のような下位尺度間の相関

係数，尺度毎の内的整合性係数が得られた。（$r_{A\cdot B}=.174^{\circ}$, $r_{A\cdot C}=.170^{\circ}$, $r_{A\cdot D}=.263^{*}$, $r_{A\cdot E}=.273^{**}$, $r_{B\cdot C}=.378^{***}$, $r_{B\cdot D}=.358^{***}$, $r_{B\cdot E}=-.014$, $r_{C\cdot D}=.026$, $r_{C\cdot E}=.208^{*}$, $r_{D\cdot E}=.149$, 但し * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, ° $p<.1$, $N=96$）．（内的整合性係数 r_{tt} A: .717, B: .712, C: .685, D: .763, E: .424, E′: 573）

尺度Eについては，尺度内で負相関，低い相関係数を示した No. 10, 25 の二項目を削除して，以後は用いることにする。

2．OR：あらかじめ無作為に選んだ三人について評定を求めた。評定基準のあいまいさ評定数の片寄りなどの限界内で得られたデータの有効性を高める為に次の手順を踏んだ。①二人以上の評定をうけているか。②「？」が多くないか。ついで①「？」の多すぎる項目②評定者間の判定の一致率の低い項目は不適切として削除した。(No. 5, 9.) 以上の手順を経て残った59人のデータについて「はい」という評定数（No. 1, 4 については「いいえ」）を総計する。総計を評定者数で割って得られた平均をその人の OR 粗点としてT得点化した。

3．TAT：Need-Pres Theory に基づき，SR の下位尺度に対応する要求が作話の中に表現されているかどうかを見た。表現されている場合1点を与え，各カードの得点を尺度毎に統計し，TAT 得点とした。無作為抽出の10人のデータについて，筆者と，臨床心理専攻の院生との間に92.2％の判定の一致をみた。判定には信頼性があるとして，残りのデータは筆者のみが判定した。

E. 指　標

1．SR：SR の下位尺度間の相関並びに TAT の得点分布から考えて，尺度BとCとは結合して用いることとした。結果は，尺度 A, D, E, B+C の4インデックスで分析する。インデックス毎に全被験者を高得点群（以後 Hi-Gr と略す），低得点群（Lo-Gr）に分けた。

2．OR：有効データ59人を，得点から Hi-Gr, Lo-Gr の二群に分けた。

3．TAT：得点から Hi-Gr, Lo-Gr の二群に分けた。但しB+C尺度は逆尺度として扱った。

4．SR-TAT タイプの分類：SR, TAT の得点の組み合わせから，被験者をインデックス毎に四つのタイプに分類した。（I…SR, TAT で共に Hi-Gr, II…SR で Hi, TAT で Lo, III…SR Lo, TAT で Hi, IV…SR, で TAT で共に Lo-）．タイプ毎の分布は表1。

Table 1. SR-TAT タイプの分布（人）

インデックス＼タイプ	I	II	III	IV	計
A	23	25	20	28	96
B	31	21	31	13	96
C	12	31	13	40	96
B+C	27	18	29	22	96

5．同調の有無：Crutchfield et al. (1962) に準じ次のものを用いた。事前意見と事後意見とを比べ，事後意見が，加えられた圧力と同一の方向へ変化している時「同調」（以後「＋」と記号化）逆方向への変化がみられた時「反同調」（「－」），変化なしは「独立」（「0」）。

＜結果及び検討＞

仮説Ⅰについて（依存性と他者評定）の結果

インデックス毎に SR-TAT タイプ四群の大きさ，OR 得点平均，標準偏差を挙げ四群の分散の同質性を検討した結果が表2である。SR, TAT を二要因とする分散分析を行なった結果が表3である。SR-TAT タイプ四群間の分散の同質性の保証されなかったインデックスDに関しては，各群での OR 高低群の分布を調べ，角変換法による二要因分散分析を行なった。

次に OR と SR, OR と TAT の相関係数を点二系列相関で算出し無相関検定を行なった。(A：$r_{OR \cdot SR}=.378^{***}$, $r_{OR \cdot TAT}=.026$, D：$r_{OR \cdot SR}=.103$, $r_{OR \cdot TAT}=.076$, E：$r_{OR \cdot SR}=.398^{***}$, $r_{OR \cdot TAT}=.247^{\circ}$, B＋C：$r_{OR \cdot SR}=.235^{*}$, $r_{OR \cdot TAT}=.046$) 全てのインデックスで $r_{OR \cdot TAT}<r_{OR \cdot SR}$ という結果が得られた。この結果は，人の日常行動が TAT よりも SR によってより強く規定されるといった仮説を支持するものと考えられる。更に，OR 得点の極端な二群（T≧60, T≦40）間について比較したところ，より顕著な結果が得られた。

仮説Ⅱについて（同調への圧力下の行動と依存性）の結果

仮説Ⅱを検討する前にまず，同調への圧力が有効に働いたかどうかを確かめねばならない。実験群，統制群における事前意見の分布を比較したところ「二群間の分布に差が無い」という帰無仮説は二課題ともで棄却できなかった。事前意見の等質性が保証されたものとして，二群間の意

Table 2. SR—TAT タイプ群毎の SD の平均.

インデックス	タイプ	N	平 均	S D	分散の同質性の検定 (V=3)
A	Ⅰ	15	51.20	8.64	$\chi^{2\prime}=.484$
	Ⅱ	16	54.81	8.72	
	Ⅲ	10	46.50	9.88	
	Ⅳ	18	45.39	8.31	
D	Ⅰ	19	50.74	6.46	$\chi^{2\prime}=7.244$
	Ⅱ	14	50.14	10.32	
	Ⅲ	21	47.81	9.70	
	Ⅳ	5	51.40	14.65	
E	Ⅰ	8	55.50	10.04	$\chi^{2\prime}=.714$
	Ⅱ	21	49.10	9.68	
	Ⅲ	9	51.44	7.53	
	Ⅳ	21	47.10	9.04	
B＋C	Ⅰ	17	46.12	9.33	$\chi^{2\prime}=.489$
	Ⅱ	17	49.24	9.24	
	Ⅲ	10	54.40	10.08	
	Ⅳ	15	50.80	8.32	

Table 3. OR 得点における SR・TAT を二要因とする分散分析表

Tadle 3-1. インデックスA

変動因	df	MS	F
SR	1	700.30	8.455**
TAT	1	21.95	.265
交互作用	1	78.26	.945
誤差	55	82.83	
全体	58	253.34	

Tadle 3-2. インデックスE

変動因	bf	MS	F
SR	1	110.81	1.219
TAT	1	348.06	3.828*
交互作用	1	12.81	.141
誤差	55	90.92	
全体	58	562.60	

Table 3-3. インデックスB＋C

変動因	df	MS	F
SR	1	340.59	3.757*
TAT	1	.81	.009
交互作用	1	158.84	1.752
誤差	55	90.65	
全体	58		

Table 3-4. インデックスD

変動因	bf	MS
SR	1	.577
TAT	1	.315
交互作用	1	.131
計	3	1.023
群内	∞	$\sigma^2\omega=76.30$

見変化の有無を比較したところ，課題2においては .1 %レベルで実験群に「＋」の者が多かった。($\chi^2=17.879$, V＝2) 課題1においても同様な傾向が見出せた。ゆえに同調への圧力の操作が一応有効に働いたものと考え，以後，依存性との関係をみる分析では実験群のみを対象に検討した。

SR-TAT タイプ四群における意見変化の有無（「＋」「0」「＋」）の分布は表4の通りである。全インデックスにおいて，SR, TAT という二つの独立変数間に有意な連関は得られなかった。(A: $\chi^2=1.947$, D: $\chi^2=.037$, E: $\chi^2=.032$, B+C: $\chi^2=.126$, df＝1) そこで二変数は一応直交しているとみなし，圧力のかかる場面での行動について情報分析による分散分析を行な

Table 4. SR-TAT タイプ群毎の意見変化の有無の分布 N＝79

Table 4-1. 課題1—A

タイプ＼変化	＋	0	－	計
I	9	8	4	21
II	6	12	4	22
III	6	5	1	12
IV	10	11	2	24
計	31	36	12	79

Table 4-2. 課題1—D

タイプ＼変化	＋	0	－	計
I	13	13	2	28
II	8	7	1	16
III	8	10	5	23
IV	2	6	4	12
計	31	36	12	79

Table 4-3. 課題1—E

タイプ＼変化	＋	0	－	計
I	3	6	2	11
II	11	12	1	24
III	6	3	4	13
IV	11	15	5	31
計	31	36	12	79

Table 4-4. 課題1 B＋C

タイプ＼変化	＋	0	－	計
Ⅰ	15	6	2	23
Ⅱ	8	8	0	16
Ⅲ	3	12	7	22
Ⅳ	5	10	3	18
計	31	36	12	79

Table 4-5. 課題2－A

タイプ＼変化	＋	0	－	計
Ⅰ	13	8	0	21
Ⅱ	11	8	3	22
Ⅲ	7	5	0	12
Ⅳ	12	10	2	24
計	43	31	5	79

Table 4-6. 課題2－D

タイプ＼変化	＋	0	－	計
Ⅰ	16	10	2	28
Ⅱ	11	5	0	16
Ⅲ	9	12	2	23
Ⅳ	7	4	1	12
計	43	31	5	79

Table 4-7. 課題2－E

タイプ＼変化	＋	0	－	計
Ⅰ	6	3	2	11
Ⅱ	12	11	1	24
Ⅲ	10	2	1	13
Ⅳ	15	15	1	31
計	43	31	5	79

Table 4-8. 課題2－E＋C

タイプ＼変化	＋	0	－	計
Ⅰ	14	9	0	23
Ⅱ	11	4	1	16
Ⅲ	10	11	1	22
Ⅳ	8	7	3	18
計	43	31	5	79

い結果を表5に表わした。インデックス毎に主効果，交互作用をみたところ，課題1．2で一貫した有意な結果は得られなかった。TAT の効果は次の通りである。A, E において TAT の Hi-

Table 5. Table にもとづく分散分析表

Table 5-1. 課題 1—A

要　因	df	χ^2=1.3836nT
SR	2	1.217
TAT	2	1.038
交互作用	2	0.632
計	6	2.888

Table 5-2. 課題 1—D

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	6.547*
TAT	2	0.351
交互作用	2	1.175
計	6	8.074

Table 5-3. 課題 1—E

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	2.404
TAT	2	2.545
交互作用	2	2.496
計	6	7.444

Table 5-4. 課題 1—B＋C

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	15.174***
TAT	2	2.420
交互作用	2	3.471
計	6	21.006**

Table 5-5. 課題 2—A

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	0.197
TAT	2	5.810°
交互作用	2	0.222
計	6	6.229

Table 5-6. 課題 2—D

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	2.052
TAT	2	1.962
交互作用	2	1.446
計	6	5.400

Table 5-7. 課題 2—E

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	0.610
TAT	2	6.133*
交互作用	2	0.828
計	6	7.571

Table 5-8. 課題 2—B＋C

要　因	df	χ^2=1.3863nT
SR	2	3.876
TAT	2	3.627
交互作用	2	0.588
計	6	8.090

注　情報分析による方法
nT=n×情報量

Gr では「＋」，Lo-Gr では「0」が有意に多く，仮説を支持する方向であった。SR の高低では「＋」「0」の分布は類似しており，SR 要因が行動を規定するとは言い難いという示唆が得られた。しかしながら，TAT で測定された依存性の高低が，SR によるよりも行動と密に係わるだろう。といった仮説に対しては，今までの結果からは明らかには回答が与えられていない。

実際のインタビューで測定した依存性の高低から，Asch 状況での行動を分析検討した山本(1965) の研究から次の様な示唆が与えられている。依存的な人は他人に影響されやすい，と考えるならば，他人との不一致を増大する方向への変化を示す「反同調」も，同調と共に依存的行動と考えられる。他方，依存的でない人は圧力に影響されにくく独自の判断を下す（「独立」）試みに本研究結果を「＋，－」群と「0」群の二群にして，SR-TAT タイプ群における分布を二要因分散分析で検討してみたが一義的な有意な結果は得られなかった。

＜考　　察＞

仮説の検討に入る前に，まず SR, TAT の関係に触れておく。本研究では，対応するインデックス毎の SR, TAT 間には有意な連関を見出すことができなかった。SR に関しては予備調査において下位尺度毎に G-P 分析を行ない，折半法によってかなり高い信頼性が保証されている。更に本実験の結果に対して内的整合性係数を算出し項目の適切さをチェックしている。一方 TAT の得点化に対しては二人の評定者間の一致を確かめてある。以上から，SR, TAT 得点は一応妥当なものと考えられる。同様の Zuckerman et al. (1961) でも TAT と SR との相関は，r=.10 という低い値であり，無相関検定で有意な値が得られなかった。これら二つの結果から，SR, TAT で測定される依存性は同一のものでない，と考えられる。このことは，SR, TAT は依存性という人格特性の異なるレベルについて測定しているのだという推測を成立させる。また，依存性と行動との関係を見る時，SR, TAT 間の交互作用がほとんど見られなかった理由の一つにもなろう。しかし仮りに二つのテストが異なるレベルを測定するものとしても，同じ依存性を測定しているならば，なんらかの低い相関があって然るべきではないか。この点については TAT 得点化における問題があげられよう。すなわち TAT は，欲求圧力理論に基づき各カードについて五要求各々が表出されているかどうかを調べ，合計している。しかしながら現実には，一つの要求が表出されることで他の要求の表出が妨げられることが多い。だから物語りの中に表出されやすい要求は，頻繁に生じ高得点になる反面，表出されにくい要求は，仮りにその傾向があっても得点化されにくいのではないか。表 1 からも要求によって TAT 得点分布の

片寄りが見られる。TAT がどのような依存性を測定しているのかも，明らかではない。

次に，OR と依存性との関係をみていく。表3は次の様にまとめられよう。SR あるいは TAT によって依存的だとされた者は，他者評定でも高依存とカテゴリー化されることが多い。他者評定で，中間のデータを省き極端に依存的とされた者（T≧60）と依存的でないとされた者（T≦40）とを比べるとこのことは一層顕著であった。ここで同一傾向を得たことで仮説支持の方向は更に強められた。常に $r_{OR\cdot SR}>r_{OR\cdot TAT}$ が成立することも明らかである。$r_{OR\cdot TAT}$ は大層低いが，ここで，他者評定でわかるような人の日常行動は，TAT で測定される依存性とは有意な関係がないという前に，TAT 得点分布には片寄りの激しいものがあった，という点を考慮に入れねばならない。ここでは TAT に高い弁別力が必らずしも保証されていなかった。ところで OR と SR, OR と TAT 間の相関をとった Zuckerman et al. (1961) では，同様，$r_{OR\cdot SR}=.28$, $r_{OR\cdot TAT}=.05$ という値を得，$r_{OR\cdot SR}$ のみ，無相関ではなかった。彼らの結果でもまた，他者評定は TAT よりも SR とより密に関係している，といえよう。

以上まとめると次の様になる。OR と二種のテストによる依存性との関係について二要因分散分析で SR の主効果が得られた。このことは特に T≧60, T≦40 の二群比較で明らかであった。更に $r_{OR\cdot TAT}<r_{OR\cdot SR}$ という関係が全てのインデックスにおいて得られた点を考え，一応，仮説Ⅰを支持する方向の結果が得られたと言えよう。

○同調への圧力操作について

事前意見の分布は，二課題とも実験群，統制群間で等質である。また，実験手続きから二度の意見調査の間に「同調への圧力」以外の要因が働く可能性は少ない様に思われる。「圧力」として与えた平均値は，実際に得られた値とは逆方向に，意見値で約2点ずらしたものである。以上から，二群間の意見変化の差異は，同調への圧力をかけたかどうかによるものだと思われる。自分以外の多数の人の意見が自分の意見とは異なる　と知ることによって生じる不安や不快感を減じる為の一手段として，自分の意見を変えて他人に合わせようとする。このことは，その様な情報を与えられなかった統制群では見られなかった点からも明らかである。

○仮設Ⅱについて

表5から明らかに様に，仮説を支持する様な一貫した有意な結果は得られなかった。仮りに，用いた測度や指標が妥当なものであるとするならば，次の様に解釈できよう。SR で，予測に反する傾向は，インデックスA,E でみられた。ところで，Aは，他人に助力や愛情を求める「養護」，E では，年長者や権威を持った者に対する尊敬や称讃を内容とする「恭順」である。ここから，これらのインデックスでの依存性が高いという場合，依存の対象がその人にとって愛されるべき価値，尊敬すべき価値をもったと認められることが前提となるだろう。その様な人を依存の対象とするのである。しかしながら本研究では実験者は見知らぬ人であり，行なった実験が被験者にとって重要な意味をもつ必然性が無いこと。また，被験者にとって短大の仲間は，依存の対象となる程には重要な存在ではなかったのかもしれない。このことは「意見や考えを誰れに準拠するのか」といった準拠集団の年令的変遷を調べた，安藤（1966）から示唆される。彼の研究から，年令が高くなるにつれ，「学校」は準拠集団とはなりにくくなる　とわかった。更に，二課題に対する意見変化の有無のみで，同調行動をとったかどうか決定することに無理があったのかもしれない。本研究と同様，意見を課題とした同調の実験では普通，多数の課題を用い，意見変化が偶然生じる危険性を小さくしているのである。

○今までは各々の場面での行動を，SR-TAT といった測度でとらえた依存性と関連があるかど

うかを見てきた。次にここでは，二場面での行動がSRとどの様な関係があるのかを見ることにする。結果は次の様にまとめられる。1．SRとORとの関連は強い，2．SRと同調の有無とは関係は，SRとORとの関係よりも弱い。本研究では，むしろ有意な関係があるとは言えない。SRが人格の自覚できるレベルを測っているとするならば，上の結果は次の様に解釈されよう。人の通常の行動は自覚できるレベルによってかなり統制されている。行動の主体としてその人自身にかなり明白に把握されている。しかしながら，自分の意見が集団の多数とは異なる　といった情報が与えられる様な時，自己評定だけでは測定できない何かが行動をより強く規定するようになるのである。

しかし，上述の結論を下す前に，以下の点を考えておかねばならない。まず第一に，自分の人格を自覚することが日常行動を統制するのだろうか。あるいは日常の行動に対する他人からのフィードバックにより自己を認知するのだろうか。明言するには本研究結果のみでは不十分である次に，用いた同調への圧力のかかる場面の吟味がなされねばならない。Deutsch, M & Gerard, H. (1955) は，同調について次の区分をしている。「規範的同調…集団の成員からの好意や受容を求めて同調すること。情報的同調…他人の意見によって社会的真実を確立する為の情報を得たり結論を得る手段として同調すること。」前者の代表的研究としてはAsch (1953), 後者としてはSherif (1936) がある。Deutschらに従えば本状況は，Sherif状況に近く，強い危機的状況とみなすにはその根拠が弱い。そうであるならば，依存性との関係をみても，まだ，自己認知レベルで場面に対応できる。だから，SRと行動との結びつきの方が，TATとの結びつきよりも強い様な結果を生じるのだろう。

Kasl et al. (1964) は，Asch状況とSherif状況とを用い，自己評定並びに投映法で測定した依存性との関係をみている。そして，同調への圧力の強いAsch状況での行動は，投映法による依存性との間に有意なネガティブな関係を見出した。逆にSherif状況では，自己評定による依存性との間に正比例の関係を見出している。この場合，Asch状況の方が被験者の心に生じる葛藤は強く，自我の脅やかされる程度も強い危機的状況と考えられよう。その時，自覚できないレベルが行動を規定するようになるのだろうと示唆された。

○TATで測定された依存性と二つの場面での行動に関しては，次の示唆が得られた。ORでの行動に対してTATはほとんど関係していない。同調の圧力下での行動に対しては，有意水準に達する様な結果は得られなかったが，正比例的な関係を暗示する様な一貫した傾向が見られた。

要求が物語りの中に表出ているかどうかという得点化の方法は，Kagan et al. (1956) を参考にしている。彼らは，求護要求のみについて調べ，要求の強さとAsch状況での同調程度との間に正の比例関係を見出した。そこから次の様な考察をひき出している。“依存的な人は自分よりも他の人の方が優れていると思うので，決定を下す様な事態では忠告や指導を進んで求めようとする。他人を集団にまで広げると，依存的な人は集団の意見の方が適切だと思うので集団の判断に同調しようとする”。(Kagan et al. 1956,p. 29)

本研究では「求護」に該当するインデックスAと同調の有無との間には有意な関係が見られなかった。この様な差異は何故生じるのだろうか。第一には本研究で用いた同調場面はSherif状況である点が考えられる。仮に，危機的な場面では自覚できないレベルの依存性が有効に行動を規定してくるとしても，圧力の弱いSherif状況で自覚できないレベルがその様に働くとは言いきれないのである。第二に，本研究ではプロジェクターによる集団式でTATを施行した。集団式施行と個別施行との間には，得られる結果にかなり高い一致が示されている。(牛島 1961, p.

240～269) しかしながらやはり集団式では個別法で測定できるものが測れなかったとも思われる。第三には，すでに述べた得点化の問題がある。同一人の作話に一貫する雰囲気，内容なども加味して得点化を考えればよかったのかもしれない。

結果に対して今までいくらかの考察を加えてきた。まとめると次の様な結論がひき出される。OR で測定される様な人の日常場面での依存的行動は，TAT よりも SR によって測定された依存性によってより強く規定される。行動は場と人格とのダイナミックスによって生じるという観点に立ち，日常場面とは異なるものとして，同調の圧力のかかる場面を導入した。しかしながら現実には圧力はさほど強く働らかず，OR でとらえられる行動と比べて，TAT が有効に働くといった結果を得ることができなかった。

明らかな結果の生じなかった理由としては以下の点が挙げられた。四つのインデックスを用いて依存性をとらえたこと，TAT を依存性の測定具に用いたこと，TAT の施行方法，欲求一圧力理論による得点化のみで TAT を分析したこと，導入した場面が危機的なものとしては弱すぎて OR との明白な差が出なかったことなど。更に被験者として女子短大生を用いた点も考えられる。日本の社会では，自分なりの考えを持ち主張するよりも，他人の考えを受け入れ従うことが女子に期待される。従順で大人しいということが「女らしい」という評価になる。その様な女子における依存性と行動との関係を明らかにするつもりであった。が，女子に期待される役割や個値感が，両者の関係を不明瞭にしたとも考えられる。一般に男子が依存的であると「女々しい」とネガティブに評価される。そこであえて依存的である男子を被験者としたならば，ここでの研究とは異なる結果が得られたかもしれない。また年令を下げた方が，人格と同調場面での行動との関係に影響を与える様な要因が少なく，明白な結果が得られたかもしれない。

＜引用文献＞

Asch, S. E. 1953 Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgement. In D. Cartwright, & A. Zander (Eds.), *Group dynamics*. Ist ed. New York: Harper & Row. pp. 151～162.

Bernardin, A. C., & Jessor, R. 1957 A construct validation of the E. P. P. S. with respect to dependency. *J. consult. Psychol.*, 21, 63～67.

Crutchfield, R. S., Krech, D., & Ballachey, E. L. 1962 *Individual in society*. New York: Mcgrow Hill

Deutsch, M., & Gerard, H. 1955 A study of normative and informational social influences upon individual judgement. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 629～636.

江口恵子 1066 依存性の研究，教心研，14，45—58

Kagan, J., & Mussen, P. 1956 Dependency themes on the TAT and group conformity. *J. consult. Psychol.*, 20, 29～32.

Kasl, S. V., Sampson, E. E., & French, J.R.P., Jr., 1964 The development of a projective measure of the need for independence: a theoretical statement and some preliminary evidence. *J. Pers.*, 32, 566～586.

Murray, H. A. 1943 *Themantic Apperception Test Mannual* Cambridge, Mass: Harvard Univ, Press.

Sears, P. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V., & Sears, P. S. 1953 Some child-rearing antecedents of dependency and aggression in young children. *Genet. Psychol. Monogr.*, 47, 135～214.

Sherif, M. 1953 *The psychology of social norm*. New York: Harper & Pros.

高橋恵子（旧姓江口）1968-a 依存性の発達的研究：I—大学生女子の依存性，教心研，16，7～21.

——— 1970 依存性の発達的研究：II—大学生との比較における高校生女子の依存性，教心研，16，216～226.

——— 1970 依存性の発達的研究：III—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性，教心研，18，65～75.

牛島義友 1961 TAT による比較. 牛島義友編著, 西欧と日本の人間形成, 金子, 246～269.
山本勝美 1965 同調性と依存性の関係についての実験的研究. 年報社会心理学 6, 146～159.
吉元　勇 1965 自己意識と性格特性との関連. 山口大学教育学部研究論業. 14, 125～134.
Zuckerman, M., & Grostz, H. J. 1958 Suggestibility and dependency. *J. Consult. Psychol.*, 22, 328.
Zuckerman, M., Levitt, E. E., & Lubin, B. 1961 Concurrent and construct validity of direct and indirect measures of dependency. *J. consult, Psychol.*, 25, 316～323.

(博士課程大学院生)

附　　記

自己評定尺度の項目

A尺度

- 愛している人に見捨てられるとどうしてよいかわからなくなる
- 悪い知らせを受ける時そばに誰か友人にいてもらいたい
- 自分の苦しみや困難について不平を言いやすい
- 知らない場所にいるとさびしく家が恋しくなる
- 病気になったりゆううつな時同情してもらいたい
- 責任をもって行動しなければならない時漠然と不安である
- 物事がうまくいかないとすぐがっかりする
- 決心する前に他人の意見を打診する
- 友人の態度や判断に頼る方だ
- 知恵や同情をあてにできる年長者を知っているので安心である

B尺　度

- 集団（ゲーム，グループ，委員会）の活動を組織したり導くのが好きである
- 自分の意見を主張して，他の人と熱心に論議する
- 少年たちの集団を指導したり規律を維持することはやさしい
- たいてい他人が私に影響するよりも私が他人に影響を与える
- 誰かと一緒の時必要な決定をするのは私の方だ
- 自分が周囲の状況を支配できるように思う
- 他人の行為を支配する時の感じが好きだ
- 必要とあれば強く自己を主張する
- リーダーになり他人を自分の意見に従わせたい
- 権力を求める奥深い欲望をもっている

C尺　度

- 自分が受け身の位置にいる時は最良の仕事ができない
- 他人が自分を圧迫しようとすると強情になり反抗的になる
- しばしば習慣とか両親の希望に反して行動する
- 私に対して権威をふりかすざ人には反論する
- 因習に従うことを要求される状況を避けようとする
- 他人の意見にかかわらず自分の道を歩む
- 他人から指示されたやり方ではやる気がしない
- 私の自由を妨げる規制や規律を無視する
- なによりも独立と自由を要求する
- たまたま権勢をもった人をだれかれ構わずに批判する傾向がある

D尺　度

- あらそってまで自分の目的を通すことができない
- うまくいかないと他人を責めるよりも自分を責める傾向がある
- 憶病者のように行動する時がある
- 争い続けるよりも相手にあやまりがちである
- 私があまりけんそんしすぎると友達は思っている
- すぐれた人の前に出ると心配で不安になる
- まちがいを犯した時はすなおにあやまる
- 異性に対してははずかしがりやできわめて内気である
- 自らに価値がないように感じてゆううつになることがある
- 苦痛に耐えなければ目的は達せられないと思う

E尺　度

- 自己を表に出さず敬服する人の為に情熱をもって働くことができる
- 自分より目上の人の悪い点よりもむしろ良い点を見る
- 自分なりの方法でことを解決しようとするよりもむしろ指示を受け入れる
- 人が良くて親切だと友達から見られている
- しばしば年長の人の忠告を求め，それに従う
- 機会さえあれば他の人をほめる方である
- 自分よりすぐれている人に同意したり真似しているのに気づくことがある
- 他人の教示に従い自分の期待されていることをする
- ふつう，習慣に従って行動する
- 自分が敬服している人に対して自分の感激と尊敬を示す